



# TOEIC® Listening & Reading Test の Part 2 の出題傾向について考察する ——ETS 作成問題の分析を通して——

井 上 治

**概要** 本論では、2016年に新しい出題形式になった TOEIC® Listening & Reading Test の公式問題集の9冊の中から3冊を取り上げて、ETS 作成の Part 2 の合計150問の設問について分析を行なう。この分析は、「質問文の語数」、「質問文の種類」、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から主に行なわれる。出版の時期が異なる3冊からのデータを比較することで、「当初」、「数年経過した後」、「最新」という3つの時期のこのパートの出題傾向とその変化について考察する。また、TOEIC 受験生に対して、Part 2 に関する有益な情報を提示することも目標とする。

**キーワード** TOEIC® リスニング&リーディング テスト, リスニング・セクション パート 2, 公式問題集, 出題傾向

**原稿受理日** 2022年9月21日

**Abstract** In this paper, the 150 questions of Part II of the TOEIC® Listening & Reading Test by ETS are analyzed, whose form of the exam questions was revised in 2016. The 150 questions are taken from three official practice books out of nine published after the revision. The analysis has been carried out mainly from three points of view: “the number of words in the question sentences,” “the types of question sentences,” and “the distracters to the question sentences.” By comparing the data based on the three books whose publication dates are different, it can be speculated on whether the trend of the Part II questions in the new test has changed in three periods: “in the early years after the revision,” “a few years after it,” and “the latest after it.” Another goal of this paper is to provide some useful information on Part II for the TOEIC® examinees.

**Key words** TOEIC® Listening & Reading Test, Listening Section Part II, Official practice book, Trend of questions

## 1. はじめに

これまでに主として大学1年生と2年生を対象に *TOEIC*® Listening & Reading Test (以下, *TOEIC*) の受験指導を行ってきたが, リスニング・セクションに関して学生から受ける質問は, 「Part 2 についてどのような練習をすればスコアアップができますか」が圧倒的に多い。この質問が多くなるのは, Part 1 には「写真」が, Part 3 と Part 4 には「質問文と選択肢」がそれぞれ設問を解く上での事前情報としてあることから攻略の糸口が見える一方で, Part 2 にはそのような情報が何もないために攻略方法が見えにくいことに起因していると考えられる。

リスニング・セクションに関しては, Part 3 と Part 4 の方が Part 2 よりもかなり難易度が高そうに見えるのであるが, 実際のところは, Part 3 と Part 4 に関しては, 「会話やアナウンスが始まる前に, 質問文と(時間的に可能ならば) 選択肢に(も) あらかじめ目を通しておく」という, いわゆる, 「質問文と選択肢の先読み」の練習を積むことによって, その正答率が Part 2 のそれを上回ることを以前に実例を挙げて述べた(井上 2018, pp. 34-35)。

さらに実例を見てみると, 近畿大学経済学部では毎年12月に1年生から3年生までの全員が *TOEIC* IP テストを受験することになっているため, 筆者は7月と受験直前に同じ問題で模擬テストを実施しているが(2020年と2021年はオンラインテストのため実施せず), 表1はその模擬テストでの Part 2 と Part 3 と Part 4 の正答数のクラス平均値を示したものである(小数点以下第四位を四捨五入)。

表1 模擬テストにおける Part 2, Part 3, Part 4 の正答数のクラス平均値(対象 2年生)

	Part 2 正答数		Part 3 正答数		Part 4 正答数		12月 <i>TOEIC</i> Listening スコア
	7月	12月	7月	12月	7月	12月	
2017 A	13.3	14.2	19.8	21.0	14.7	16.0	291
2017 B	13.1	14.5	20.5	21.8	15.0	16.0	318
2018 C	14.4	<b>14.3</b>	22.7	24.5	17.5	18.6	321
2018 D	13.5	14.3	23.6	<b>22.3</b>	16.8	17.5	297
2019 E	15.1	16.7	23.1	23.8	16.2	18.7	327
2019 F	15.0	<b>14.8</b>	22.7	24.4	16.9	18.7	322

3つのパートは設問数が25問, 39問, 30問と異なるため, ここではパート間の数値を比較するのではなく, 次の点に注目したい。それは, 12月の数値が7月のそれよりも下がっているものをフォントを大きくしてゴシック体で示しているのであるが, Part 2の数値が下がっている「2018 C」と「2019 F」の2クラスが, Part 3の数値は1.8問, 1.7問と6クラス中1位と2位の伸びを, Part 4の数値は1.1問, 1.8問と6クラス中4位と2位の伸びを示し, 12月のTOEICのListeningスコアは290点台の下位2クラスではなく, 320点前後の上位4クラスに属していることである。

模擬テストまでの授業内では, Part 2の「質問文のディクテーション」を中心とした演習と, Part 3とPart 4の「質問文と選択肢の先読み」を中心とした演習をそれぞれ十分に行なっている。この点も考え合わせると, この注目点は, Part 3とPart 4の演習方法によってこれらのパートを解くことができ, (そして, TOEICで高いListeningスコアを取得できる) Listening能力を伸ばすことができる学生でも, Part 2の演習方法ではこのパートを解くListening能力が伸びない場合があることを示している。

実際のところ, 筆者は, 上記の学生からの質問には, 「設問を解いた後に, 質問文と選択肢を聴き取って書き取るディクテーションと, 質問文を追いかけるように発音していくシャドーイングを必ずすること」と返答していて, それが現時点ではPart 2に対応する最もすぐれた演習方法と思っているのだが, Part 3とPart 4に対応する演習方法に感じている手応えにくらべると, 物足りなさを感じている。そして, その物足りなさを表1のデータが証明する形になってしまっており, Part 2は, 「事前情報がない, 純粋にリスニング能力を試されるパート」であるという理由だけでは説明できない, 攻略のむずかしいパートだと改めて考えさせられている。

攻略することがむずかしいと感じているPart 2に関して, 筆者がその攻略方法を提示したり, 難易度を予測しようとしたりすることを定期的に続けている理由は, 「Part 2がリスニング・セクションの出来・不出来を決める要のパートである」と考えているからであることは以前に述べたが (井上 2018, p. 34), 表現を少し改めてみたい。Part 2には「写真」や「質問文と選択肢」という事前情報がないので, どの受験者も「今日は上手くできないのではないだろうか」と不安に思う「心理的難易度」が高いパートであると言える。ということは, 逆に「今日も上手くできている」と感じることができれば, 残りのPart 3とPart 4を自信と心の余裕をもって戦うことができ, 結果的にリスニング・セクションのスコアを大きく伸ばす要因になるパートなので, Part 2を「要のパート」と考えているのである。そういうわけで, 筆者は, 受験者のPart 2に対する「心理的難易度」

を少しでも下げるために、「写真」や「質問文と選択肢」に匹敵するようなこのパートの情報をできるだけ提供したいと考えているのである。

そこで今回は、公開テストは2016年5月29日実施分から、団体特別受験制度（IPテスト）は2017年4月から新しい出題形式になった *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading Test について、2022年9月時点で出版されている合計9冊の公式問題集から、3冊目に当たる『公式 *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading 問題集 2』（2017年2月 以下、『問題集 2』）、6冊目の『公式 *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading 問題集 5』（2019年6月 以下、『問題集 5』）、そして、最新で9冊目の『公式 *TOEIC*<sup>®</sup> Listening & Reading 問題集 8』（2021年10月 以下、『問題集 8』）の3冊を取り上げ、それぞれに収載されている ETS（Educational Testing Service）作成の Part 2 の合計150問の設問について、さまざまな観点から分析を行ない比較することによって、このパートの出題傾向とその変化について考察する。

これまでと同様に、「質問文の語数」、「質問文の種類」、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点を中心に、新しい観点も交えて分析を行なうが、取り上げる3冊の出版間隔がちょうど2年4か月ずつ開いているので、新しい出題形式の「当初」、「数年経過した後」、「最新」の3つの段階における傾向を比較できていることになるであろう。そして、今回の分析を通して、TOEICを受験する学生に対して、Part 2に関する有益な情報を少しでも多く提示することができればと考えている。

## 2. 「質問文の語数」から出題傾向を考える

まずは、「質問文の語数」という観点から、新しい出題形式になってからの Part 2 の出題傾向を考えてみたい。語数が多くても単音節の語が多ければ音声的には短くなるので、語数の多さと音声的な長さは必ずしも比例するわけではないが、基本的には語数が多いと音声的にも長い質問文となる。そして、音声的に長い質問文になればなるほど質問の内容を把握しにくくなるのは当然のことなので、選択肢が簡単すぎない限りは、設問に正解できる確率は下がる。つまり、パート全体の難易度は「質問文の語数」が少ない設問が多いと低くなり、「質問文の語数」が多い設問が多いと高くなる。この考え方から「質問文の語数」を分析して出題傾向の流れを考察してみたい。

表2は、3冊の公式問題集の「練習テスト」（本番と同様に200問で構成されており、各問題集に2セットずつ収載されている）ごとに、Part 2 の「質問文の語数の平均値」を算出したものである。

表 2 質問文の語数の平均値 (小数点以下第三位を四捨五入)

問題集 2		問題集 5		問題集 8	
TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
8.84	8.28	8.12	8.16	8.28	8.36

この表からは、『問題集 2』の「TEST 1」の数値の高さが目立つが、それ以外の 5 つのセットの数値間ではそれほど大きな差異はないことがわかる。また、問題集ごとに見ると、平均値は順に 8.56, 8.14, 8.32 となるため、出題傾向はほぼ変わっていないと言えるであろう。あえて細かく言うと、Part 2 は「当初」はやや難易度が高かったが、「数年経過した後」にやや難易度が低くなり、「最新」ではその間で難易度は安定しているということになるであろう。

表 3 質問文の語数の分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
4語		1				1
5語	3	1		1		2
6語	2	2	5	3	4	2
7語	2	6	4	5	6	4
8語	3	3	7	5	5	4
9語	6	3	4	7	3	6
10語	4	7	3	2	5	2
11語	3	1	1	1	1	1
12語		1	1	1		2
13語					1	
14語	1					1
15語	1					

表 3 は、Part 2 の「質問文の語数の分布」を「練習テスト」ごとに 25 問中の設問数で示したものである。すべてのセットで 6 語から 11 語までの質問文は少なくとも 1 問は設定されており、4 つのセットで 25 問中 22 問から 24 問 (88% 以上) がこの範囲内に収まっている。残りの 2 セットではその割合が 80% 以下になっているが、12 語が 2 問と 14 語が 1 問ある『問題集 8』の「TEST 2」では 4 語を 1 問と 5 語を 2 問設定することで、そして、14 語と 15 語が 1 問ずつある『問題集 2』の「TEST 1」では 5 語を 3 問設定することでバラ

ンスが取られている。この分布から見ると、出題傾向はほぼ変わっていないと言えるだろう。

ここでさらに、今回分析した「質問文の語数の平均値」は150問全体では8.34であるため、表3について8語以下と9語以上に分けて「質問文の語数の分布」を見てみた。すると、9語以上の設問数が25問中で順に15問、12問、9問、11問、10問、12問となり、問題集ごとに見ると、27問、20問、22問となった。先ほどの「質問文の語数の平均値」のところでは「あえて細かく言うと」という表現で述べたが、「質問文の語数の分布」を8語以下と9語以上に分けて考察した場合には、Part 2は「当初」はやや難易度が高かったが、「数年経過した後」にやや難易度が低くなり、「最新」ではその間で難易度は安定しているということが「あえてではなく言える」であろう。

以上、「質問文の語数」という観点からPart 2の出題傾向を見てきた。「質問文の語数の平均値」から見ると、出題傾向はほぼ変わっていないと言えるが、「質問文の語数の分布」を「質問文の語数の平均値」と掛け合わせて考えると、出題傾向が変化してきたと言える。語数の多さと難易度の高さが比例すると考えられるので、Part 2の出題傾向は、その難易度が「当初」はやや高く、「数年経過後」にやや低くなり、「最新」はその中間のレベルで落ち着かせようとしていると言えるであろう。

### 3. 「質問文の種類」から検討する

次に、「質問文の種類」という観点から、新しい出題形式になってからのPart 2の出題傾向を考えてみたい。質問文の種類分けについては、これまでと同様に、国際ビジネスコミュニケーション協会が以前に発刊していた『TOEIC® テスト 公式プラクティスリスニング編』のPart 2の章立てを基本に、「WH 疑問文」、「Yes/No 疑問文」、「選択疑問文」、「依頼・許可・提案・勧誘の文」（以下、「依頼・提案の文」）、「付加疑問文と否定疑問文」（以下、「付加・否定疑問文」）、「肯定文と否定文」の6種類に分類する。

表4は、Part 2の質問文に関して、6つの「質問文の種類」に分けて、25問中の設問数でその分布を示したものである。質問文が複数の種類の特徴を持っている場合には、①「選択疑問文」と「肯定文と否定文」であることは他の4種類の文であることに優先する、②「WH 疑問文」であることは「(付加疑問文と) 否定疑問文」であることに優先する、③「依頼・提案の文」であることは「(付加疑問文と) 否定疑問文」と「Yes/No 疑問文」であることに優先する、④ How about ~? と Why don't you ~? だけは「WH 疑問

表 4 質問文の種類分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
WH疑問文	10	10	12	12	11	12
(うちWhoなど)	(8)	(8)	(9)	(10)	(8)	(9)
Yes/No疑問文	2	3	2	3	1	2
選択疑問文	2	2	2	1	2	2
依頼・提案の文	3	4	3	3	5	1
付加・否定疑問文	5	4	3	4	4	4
(うち否定疑問文)	(3)	(2)	(2)	(2)	(2)	(3)
肯定文と否定文	3	2	3	2	2	4

文」ではなく「依頼・提案の文」に分類する, ⑤~, right? は「付加疑問文(と否定疑問文)」に分類する, という条件で仕分けを行なった。また, 「WH 疑問文」の中に設定した「Who など」とは, 「理由・方法・内容を尋ねる Why・How・What」以外の, 「人・物事・場所・時間などを尋ねる Who・What・Where・When・How long など」の疑問詞を用いた WH 疑問文を指している。さらに, 「否定疑問文」と「現在完了」と「受動態」が, 日本語を母語とする英語学習者の三大苦手文法であると筆者は考えているので, 「付加疑問文と否定疑問文」の中に「否定疑問文」を設定した。

表 4 を見ると, 『問題集 8』の「TEST 2」において, 「依頼・提案の文」の設問数が 1 になっているのが目立つが, 問題集ごとの括りで見ると, 『問題集 8』での「依頼・提案の文」の設問数は他の問題集のそれと変わらない。この他に目立った数値の差はないことから, Part 2 は, 新しい出題形式になった当初から現在までずっと, 「質問文の種類」ごとにほぼ固定された設問数で構成されていることがわかる。すなわち, 「質問文の種類」という観点からの出題傾向は当初から変わっておらず, 今後もこの出題傾向が続くことが容易に推察できる。したがって, この表が示す Part 2 における 6 種類(「Who など」と「否定疑問文」も含めると 8 種類)の質問文の設問数の構成は, TOEIC 受験者にとってとても有益な情報であると言える。

ここでもう少し, 上記の質問文 6 種類の中から「(付加疑問文と) 否定疑問文」に関連した分析を行なってみよう。先ほど, 筆者が考える日本語を母語とする英語学習者の三大苦手文法は「否定疑問文」と「受動態」と「現在完了」であることに触れたが, Part 2 の質問文にそれら 3 つの文法事項がどれだけ含まれているかを 25 問中の設問数で示したものが表 5 である。

表5 質問文における3つの文法事項の分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
否定疑問文	4	2	3	3	4	4
受動態	2	2	1	2	<b>6</b>	<b>4</b>
(うち間接的)	(0)	(0)	(0)	(0)	(2)	(1)
現在完了	2	1	0	3	<b>3</b>	<b>3</b>
(うち間接的)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)
2つの組み合わせ	<b>2</b>	0	0	0	<b>2</b>	<b>2</b>
3つの組み合わせ	0	0	0	0	<b>1</b>	<b>1</b>

表4では「否定疑問文」であることよりも「WH疑問文」と「依頼・提案の文」であることが優先されていたので、表5の「否定疑問文」の数値は、表4の「うち否定疑問文」の数値よりも増加している。また、「受動態」と「現在完了」には質問文中で“*It looks like they've expanded their dinner menu.*”（『問題集5』別冊『解答解説』, p.106）や、“*When is my article going to be published?*”（『問題集8』別冊『解答解説』, p.11）のように、従属節や句の中で使われているものも含めているので、それらのタイプの設問数は「うち間接的」として示した。さらに、3つの文法事項が同時に使用されている場合を、「2つの組み合わせ」、「3つの組み合わせ」として示した。

ここでも、数値が目立つものを、フォントを大きくしてゴシック体で示しているが、問題集ごとに見た場合に、『問題集2』の「Test 1」の「2つの組み合わせ」が2件あることを除くと、『問題集2』と『問題集5』ではほぼ同じ傾向となっている。

それに対して、「最新」の『問題集8』ではさまざまな変化が目立って見られる。まず、3つの文法事項すべてが増加している。特に、受動態が倍増しており、質問文の一部分で間接的に使われるようになっている。次に、『問題集5』ではまったく見られなかった「2つの組み合わせ」が再び使われて、件数も倍増している。さらには、『問題集2』と『問題集5』ではまったく見られなかった「3つの組み合わせ」が、“*Why haven't the tables been set for dinner service?*”（『問題集8』別冊, p.9）や、“*Hasn't the redesigned Web site been launched already?*”（『問題集8』別冊, p.11）のように用いられている。この結果は、「最新」の『問題集8』において出題傾向が変化していることを明らかに示しており、3つの文法事項が三大苦手手法であることから、「最新」のこのパートの難易



度は高くなっていることが十分に推察できる。

以上、「質問文の種類」という観点から Part 2 の出題傾向を見てきた。「質問文の種類」の分布から見ると、出題傾向はほぼ変わっていないと言えるが、「質問文における3つの文法事項の分布」から考えると、「最新」になって出題傾向が変化してきたことが明らかになった。「否定疑問文」と「受動態」と「現在完了」は理解することが難しい文法事項だと考えられるので、Part 2 の出題傾向については、その難易度が「最新」では高くなっていると言えるであろう。

#### 4. 「質問文に対する誤答の選択肢」から検討する

最後は、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点から、新しい出題形式になってからの Part 2 の出題傾向を考えてみたい。以前からずっと取り扱ってきた2つの攻略法「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」を、今回の分析においても取り上げながら考察していきたい。

まず、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」についてである。表6は、Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、「WH 疑問文」の誤答の選択肢の総数に対して Yes/No で答える選択肢の個数とそのパーセンテージを示し、「選択疑問文」についても同様の分析を行なったものである（パーセンテージについては小数点以下第四位を四捨五入）。

表6 WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える誤答選択肢の分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
「WH疑問文」にYes / No	0	3	5	6	3	3
(誤答選択肢総数)	20	20	24	24	22	24
(パーセンテージ)	0	15	20.8	25	13.6	12.5
選択疑問文にYes / No	0	2	0	0	1	1
(誤答選択肢総数)	4	4	4	2	4	4
(パーセンテージ)	0	50	0	0	25	25

今回の分析においても、表6に含まれていない「WH 疑問文の形をとる依頼・提案の文」を含めても、「WH 疑問文」と「選択疑問文」に対して Yes/No で答える選択肢はすべて誤答選択肢であった。表6からは、「WH 疑問文」については、『問題集2』で少なかったものが『問題集5』で大幅に増え、『問題集8』でその間の数値に落ち着かせようとしていることがわかる。これは、「質問文の語数の分布」を「質問文の語数の平均値」と掛け合わせて考えた際に見た傾向と同様である。質問文を聴いて「WH 疑問文」であると判断するのは容易であり、Yes/No で答えている選択肢を聴き取ることも容易であることから、この傾向は Part 2 の難易度は新しい出題形式になって「数年経過後」にいったん低くなったが、「最新」では「当初」の難易度との中間レベルになっていることを示している。

他方、「選択疑問文」については、『問題集2』で2件あったものが『問題集5』ではなくなり、『問題集8』で元の数値に戻っている。「WH 疑問文」の場合と同様に、Yes/No で答えている選択肢を聴き取ることは容易なので、この傾向は「最新」では「当初」の難易度に戻ってその難易度は低くなっていることを示している。

しかし、「WH 疑問文」の設問数が Part 2 全体のその40%~50%を占めることから、Part 2 全体の傾向に大きく影響があるのに対して、「選択疑問文」のそれは全体の10%にも満たないため、全体の傾向への影響はかなり小さい。また、質問文を聴いて「WH 疑問文」であると判断することが容易であるのにくらべると、or を聴き逃してしまうことも多いことから、質問文を聴いて「選択疑問文」であると判断することはむずかしい。このことから、表6での分析においては、「WH 疑問文」に関する結果をより重視することで問題ないと思う。

次に、もうひとつの攻略法「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」について見てみる。「同じ語」とは、質問文 “How about stopping at the new coffee shop on our way to work tomorrow?” と選択肢 “A pound of coffee, please.” (『問題集2』TEST 1, 14番) では coffee のことを指し、品詞違い・同じ品詞の意味違い・名詞の単複もこれに含む。「似た音の語」とは、質問文 “You liked that movie, didn’t you?” と選択肢 “I’m moving next month.” (『問題集5』TEST 1, 7番) では movie と moving のことを指し、「派生語」とは、質問文 “Would you like to speak to a customer service representative?” と選択肢 “The keynote speech.” (『問題集8』TEST 1, 15番) では speak と speech のことを指し、動詞の活用形はここに含む。

表 7 質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む誤答選択肢の分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
同じ語・似た音の語・派生語	16	16	12	9	14	10
(パーセンテージ)	32	32	24	18	28	20

表 7 は、Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、「練習テスト」ごとに50個ある誤答選択肢に含まれる「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」の個数とそのパーセンテージを示したものである。

ここでも傾向の変化がはっきりと見られる。誤答選択肢の中の「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」の個数に関して、『問題集 2』で多かったものが『問題集 5』でかなり減り、『問題集 8』でその中間の数値に落ち着こうとしている。誤答選択肢の中にこの種類の選択肢が含まれていると、Part 2 が 3 択設問から 2 択設問（に、さらには正答が確定する設問）になるわけなので、この傾向はこのパートの難易度は新しい出題形式になって「数年経過した後」にいったん高くなったが、「最新」では「当初」の難易度との中間レベルになろうとしていることを示している。

先ほど見た「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える誤答選択肢の分布」における『問題集 2』と『問題集 5』の間の難易度の向きは難→易だったので、ここでの向きである易→難とは逆であるが、『問題集 8』でその中間値を取ろうとしていることは同じである。つまり、「最新」の Part 2 の傾向は、これまでの平均を取ろうとしていると言えるのである。

最後に、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」という2つの攻略法を合わせたものを分析して、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からの Part 2 の出題傾向をまとめてみたい。

表 8 2つの攻略法を合わせた誤答選択肢の分布

	問題集 2		問題集 5		問題集 8	
	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2	TEST 1	TEST 2
2つの攻略法の合計	16	18	15	14	18	13
(パーセンテージ)	32	36	30	28	36	26

表8は、Part 2の質問文に対する選択肢に関して、「練習テスト」ごとに50個ある誤答選択肢に含まれる「WH疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」の合計数（ある選択肢に両方の要素が重なっている場合には、のべ数とせず1と数えた）とそのパーセンテージを示したものである。

この表から見た傾向であるが、「練習テスト」ごとの数値にはあまり大きな変化は見られない。問題集ごとに見た場合にも、あえて言うと「易→難→その中間」という傾向になっているが、その数値に大きな変化は見られなくなった。これは、「WH疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢」では「難→易→その中間」、**「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」**では「易→難→その中間」であるが、前者の選択肢の個数よりも後者の選択肢の個数が多いわけなので、（あえて言うと）「易→難→その中間」になるのは当然のことである。

以上、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点から、新形式問題における Part 2の傾向を見てきた。それぞれの攻略法に関しては増えたり減ったりという傾向の変化があったが、2つの攻略法を合わせた数値から考察すると全体のバランスが取られていることがわかった。したがって、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からは、新形式になってからの Part 2の出題傾向は変わっておらず、難易度も「当初」から「最新」まで一定のものになっていると言えるだろう。

## 5. お わ り に

本論文では、新しい出題形式の公式問題集から3冊を取り上げ、ETS作成の Part 2の合計150問の設問に関して、「質問文の語数」、「質問文の種類」、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点を中心に分析を行ない、3つの時期での比較をすることによって、新形式問題における Part 2の出題傾向とその変化について考察してきた。

まず、「質問文の語数」について、「質問文の語数の平均値」からは出題傾向の変化は見られなかったが、「質問文の語数の分布」と「質問文の語数の平均値」の関係を考えると、出題傾向の変化が見られ、その難易度も「やや高い→やや低い→その中間」と変化していることがわかった。次に、「質問文の種類」について、「質問文の種類」からは出題傾向の変化は見られなかったが、「質問文における3つの文法事項の分布」を考えると、「最新」での出題傾向の変化が見られ、その難易度が高くなっていることがわかった。最

後に、「質問文に対する誤答の選択肢」について、それぞれの攻略法に関しては出題傾向の変化が見られたが、2つの攻略法を組み合わせると出題傾向には変化がないと見ることができ、その難易度も「当初」から変わらないことがわかった。

また、今回の分析を通して TOEIC 受験者に Part 2 に関する有益な情報を提示したいと述べたが、「質問文の種類」ごとにほぼ固定された設問数で構成されている、「否定疑問文」と「受動態」と「現在完了」を含む質問文の割合が増えている、攻略法「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」は変わらず有効である、という3点を提示することができるかと筆者は考えている。一方、攻略法「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」についてであるが、今回の分析では、77 (表7の合計数) ÷ 99 (条件に該当するが、表7に含まれなかったもの、すなわち、「正答」の合計数22を加えたもの) = 77.8% (小数点以下第四位を四捨五入) となった。この数値は85%を下回っているが、最新の『問題集8』だけを見ると、24 ÷ 27 = 88.9% (小数点以下第四位を四捨五入) と85%を上回っているため、攻略法「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」も変わらず有効である、という情報もかろうじて提示することができるのではないかと考えている。

#### 引 証 文 献

- [1] Educational Testing Service. 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 2』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2017年2月。
- [2] ——. 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 5』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2019年6月。
- [3] ——. 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 8』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2021年10月。
- [4] ——. 『TOEIC® テスト 公式プラクティス リスニング編』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2011年2月。
- [5] 井上 治. 「TOEIC® テスト初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法——ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』(近畿大学経済学会) 第4巻第3号 (2007年3月) : 47-59.
- [6] ——. 「TOEIC® テスト初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法再考——近畿大学経済学部の TOEIC® テストへの取り組みとともに」『生駒経済論叢』(近畿大学経済学会) 第6巻第2号 (2008年10月) : 115-131.
- [7] ——. 「TOEIC® テストの新形式問題におけるパート2の難易度を推察する——ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』(近畿大学経済学会) 第14巻第2号 (2016年11月) : 27-40.
- [8] ——. 「TOEIC® テストの新形式問題におけるパート2の難易度を再推察する——ETS 作成問題の分析を通して」『生駒経済論叢』(近畿大学経済学会) 第15巻第1号 (2017年7月) : 41-58.
- [9] ——. 「TOEIC® テストの新形式問題におけるパート2の難易度をさらに考察する——ETS 作

成問題の分析を通して』『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第16卷第2号（2018年11月）：  
33-48.